

怪談物件マヨイガ

蒼月海里

第四回

餓鬼がきの住処すみか

港区女子みなとくじよし、という言葉がある。

それは、港区に住んでいて身なりが美しく、セレブのような遊び方さじみゆめのをしている女性達だと、里見夢乃さとみゆめのは聞いた。

夢乃はそんな生活に憧れていた。

だが、彼女の収入では、港区の高級住宅街に住まうことがままならなかった。

港区女子になるには、東京都港区のどこかに住むしかない。しかし、六本木ろっぽんぎや麻布十番あざぶじゅうばんなどは高嶺たかねの花だった。

そんな夢乃であったが、シェアハウスがあるというのをネットで知った。

場所は、品川駅しながわの近くにあるタワーマンションだ。

十三階の一部屋を、四人でシェアするのだという。

個室は埋まうっていて、空いているのはドミトリのみであったが、夢乃は意気揚々と入居を決めた。

何せ、憧れの港区生活だ。しかも、セレブで勝ち組の象徴と言わ

れるタワーマンションに住めるなんて。

自分の華やかな港区生活はここから始まるのだと、夢乃は期待に胸を膨らませて港区デビューをしたのであった。

輝くレインボーブリッジで彩られた夜景を背に、三十階を超える高層マンションがそびえ立っている。そのてっぺんは、空を仰ぎ見るようにしなくては窺うことは出来ない。

オートロックの扉をキーカードで開けてエントランスへと足を踏み入れれば、高級ホテルのようにシャンデリアを下げたロビーとフロントが夢乃を迎える。

「お帰りなさいませ」と一礼する初老のコンシェルジュは、執事のようなたたずまいだ。穏やかな館内BGMに包まれながら、大理石の床に足音を響かせてエレベーターホールへと向かう。

エレベーターホールには何機ものエレベーターが並んでおり、高層階行きと低層階行きで分かれている。

夢乃が向かうのは、低層階行きだ。十三階というところかなりの高層だと思った夢乃であったが、タワーマンション的には低層らしい。

高層階行きのエレベーター前では、安く量産されたようなデザインの服を着た、平凡な姿の女性が幼子を連れてエレベーターを待っている。とてもではないが、港区のタワーマンションに住んでいるとは思えないと夢乃は心の中でせせら笑うが、きっと、夫の稼ぎが

良いのだろう。

せいぜい養ってもらおうことね、と思っていると、今度は、くたびれたジーンズを穿いた冴えない男性がエレベーターホールに入ってきた。

なんとなく、同じエレベーターになるのは嫌だなと感じた夢乃であったが、男性は子連れの女性の後ろに並んだ。

夢乃が目丸くしていると、目の前のエレベーターの扉が開いた。結局、低層行きのエレベーターに乗ったのは、夢乃だけであった。

「あんな格好でこの周辺をうろつくなんて、信じられない。うちのマンションの品位を落とすじゃない」

エレベーターの扉が閉じるか閉じないかといううちに、夢乃の本音が口について出てしまった。

世の中には、TPOというものがある。会社で営業職をしている夢乃は、特にそれを意識していた。

営業をする時は、誠実さを演出して信頼を獲得するために、清潔感があるスーツ姿が望ましい。そして、セレブの街である港区に住む時は、街の品位を落とさないようにブランド物を身にまとわなくてはいけない。

「だから、私は努力しているのに」

昼は会社で働き、夜は合コンで知り合った男性とディナーに出かける。そこでプレゼントされたブランド品を身にまとい、港区に相応

しい女になる。

美容院で髪を整え、ネイルサロンで美しいネイルを施してもらおう。出来る限り自分に投資して、この街の輝きにかき消されないようにしなくてはいけない。

そうでなければ、この街では生き残っていけないから。

十三階でエレベーターから降り、自分の住まいへと足早に向かった。床に敷かれた絨毯じゅうたんが、ヒールの音をそっと包み込んでくれた。

「ただいま」

部屋の扉を開くと、むわっとアロマの香りが夢乃を包んだ。

「おかえりー」

「早かったじゃん。お風呂湧いてるけど、入る？」

シェアハウス仲間の、愛莉あいりと紀美加きみかがラウンジで迎えてくれる。

ラウンジといっても、十二畳のリビングダイニングルームのことだが。

彼女らは、個室を使っているメンバーだ。二人ともラフな格好でテレビを見ていたが、家の中は寛くわぐ場所だからそれでいい。

「ありがと。入る」と二人に応じながら、夢乃は自分の部屋へと向かった。

夢乃の部屋はドミトリーだ。

六畳ほどの洋室のど真ん中がパーテーションで仕切られており、生活スペースが左右に分かれている。夢乃の生活スペースは、その

左側だ。

ベッドと小さなクローゼットしかない、簡素な部屋だ。

パーティーションで真つ二つにされた窓からは、港区のキラキラした夜景が窺える。無数の光が瞬いて見える様子は、まさに宝石のようだ。

窮屈な部屋でも、この夜景が見えれば構わないと思った。

「英美里は？」

夢乃は自分の部屋からひよいと顔を出すと、ラウンジの二人に尋ねた。

エミリというのは、相部屋の右側を使っている人物だ。

アイリとキミカは、顔を見合わせる。

「さあ」

「また終電ギリギリで帰って来るんじゃない？」

二人は、苦笑しながらそう答えた。エミリは遊び癖が強く、朝帰りをするのも珍しくなかった。

「そっか。まあ、それまで気楽に出来ると思えばいいかな」

「そうそう。相部屋って、ストレスが溜まるんでしょ？」

アイリが、さも聞いたかのような口調で同意した。だが、夢乃は首を傾げてしまう。

「まあ、そうだけど……。私、そんなこと言ったっけ」

すると、アイリが「しまった」と言わんばかりに口を噤む。それ

を見たキミカは、顔を覆った。

「もしかして、エミリがそう言ってるの？」

夢乃が詰め寄ると、二人は気まずそうに顔を見合わせる。そして、観念したように頷いた。

「エミリ、夢乃が来る前までは一人であの部屋を使ってたし、窮屈になっただって言ってるさ……」

ここだけの話、と言わんばかりに、キミカは声を潜める。

「その気持ちはわかるけど、元々ドミトリーだったし……」

「エミリ的には、先に入居者がいるドミトリーに入ろうとする奴の気が知れないんだってさ。他人と一緒にだと気まずいから避けるだろうって思っただけ、安いドミトリーにしたみたい。ちょっと勝手だよ」

キミカは苦笑する。

「わかる。エミリはシューズクロゼットも使いまくってるじゃん？ この前、私の棚まで使ってたんだよ」

「有り得くない？」とアイリは夢乃に同意を求める。「まあ、うん

……」と夢乃は苦笑いを浮かべながら、曖昧に頷いた。

きつと、エミリにも同じように応じていたんだろう。

エミリが、ドミトリーに後入りするのは常識外れだと愚痴をこぼした時に、「夢乃は確かに、そういうところがある」とでも言っていたのだろう。

二人とも鍵付きの個室を持っている。ドミトリーであるエミリと

夢乃の愚痴を聞きながら、優越感に浸^{ひた}っていたかもしれない。

そんな考えが、夢乃の脳裏を支配した。

(嫌な感じ……)

入浴しても振り払えず、夜景を見つめていても頭をチラついてしまいい、夢乃はそれらをさっさと忘れるべく、早めにベッドに潜^{ひそ}ったのであった。

その夜、夢乃は妙な夢を見た。男と女の、艶^{なま}めかしい物音を聞いているという夢だ。

(違う。これは夢じゃない……)

夢乃の目が覚める。薄いパーテーション越しに、人の気配を感じた。

同室のエミリだけではない。もう一つ、気配がある。

(男を連れ込むなんて、信じられない……!)

当たり前だが、女性同士のシェアハウスでそんなのはご法^{はっ}度だ。だが、ここで乗り込む勇氣もない。

相手は二人だ。逆上されたら始末に負えない。

夢乃は、彼らの語らいを振り払わんと、掛け布団を頭から被って眠ることに専念する。怒りに震える指で、スマートフォンをリスレコーダーをオンにしながら。

翌朝、エミリの姿はなかった。昨夜のことが嘘のように、彼女のベッドは整えられたままだった。

だが、ラウンジで朝食をとっているアイリとキミカは剣呑な空気を醸し出していた。夢乃が姿を現すと同時に、キミカが彼女のことをねめつけた。

「あのさ、聞き耳を立ててたわけじゃないんだけど」

そんな前置きで彼女の口から語られたのは、昨夜の物音のことだった。

夜中に男性のものと思しき足音が聞こえて、聞き覚えがある足音とともに、夢乃の部屋に入って、その直後から、怪しげな物音がしたというのだ。

「私も、それっぽい物音を聞いたんだよね。夢乃ちゃん、もしかして、男を連れ込んだ？」

アイリも胡乱な眼差しだ。

夢乃は即座に、「違う！」と反論した。

「連れ込んだのはエミリだってば！ エミリが夜中だけ帰って来たの！」

スマートフォンをラウンジのテーブルに叩きつけ、録音データを二人に聞いてもらう。すると、二人の顔色はみるみるうちに青ざめた。

「信じられない……」

「いや、マジで有り得ないでしょ……」

二人とも、不潔なものを見る目でスマートフォンを見ていた。正確には、スマートフォンから発せられるエミリの声か。

「ただいまア」

最悪なタイミングを見計らったかのように玄関の扉が開き、派手な装いのエミリが現れる。

「ごめーん。今日も朝帰りしちゃって」

甘ったるい声とフレグランスが、爽やかな朝をかき乱す。弾かれるように立ち上がったのは、キミカだった。

「エミリてめえ！」

掴みかからんばかりの勢いで詰め寄る。エミリはぎよっとして目を剥いた。

「あれだけ男を連れ込むなって言ったのに、連れ込んだだろ！」

「えっ、何のこと？ 私は昨夜、出かけてただけど」

「嘘つけ！ 夢乃が録音してたんだよ！ 昨晚、あの部屋であったことを！」

その瞬間、エミリはすさまじい形相で夢乃を見やった。怨嗟が渦巻く眼差しに怯む夢乃であったが、ご立腹のキミカがその間に立ちはだかった。

「デメエ、このヤロウ！ うちホテルじゃねーんだぞ！」

怒髪天の勢いのキミカが、エミリに掴みかかる。

「ちよっと、キミカちゃん！」とアイリが慌てて止めようとするが、キミカが拳を振り回すので近づけない。

「夢乃ちゃん、止めるのを手伝って！」

「う、うん」

夢乃はアイリに頷き、キミカを羽交い絞めにしてなんとか場を収めようとする。エミリは既に叩かれていて、左頬を真っ赤に腫らしていた。

(いい気味。私が味わった不快感を考えれば、安いくらいだわ)

夢乃はそうは思うものの、さすがに、これ以上顔を殴られるのは可哀想だ。これを機に、態度を改めてくれればいいと思いつつ、怒りまくっているキミカを引き剥がす。

その時、夢乃は同情を撤回した。

仰向けにされていたエミリは、怨霊じみた目で夢乃を睨みつけていたからだ。秘密を暴露した夢乃に対して、言いやうのない怒りに駆られているようだった。

悪いのは自分の方なのに、逆恨みではないだろうか。

夢乃の心に暗雲が差す。港区の夜景のように輝いていた気持ちは、どんよりとくすんでいったのである。

その日から、エミリは誰とも口を利かなくなった。

アイリはオロオロしていたが、キミカは当然のようにエミリを無

視していたし、夢乃もまた、エミリがいないように振る舞っていた。

だが、数日後の朝、冷戦を続けていたエミリは、一足遅くラウンジに乗り込んで来てこう言った。

「私のバッグが消えた」と。

「知るか。酔ってどこかに置きっ放しにしたんじゃない？」

キミカはエミリの方を見ずに、そう言った。

「しないってば！ 昨日、ちゃんとクローゼットにしまったのを覚えてるし」

「でも、部屋は鍵をかけてるよね？」

アイリは首を傾げる。

自然と、彼女らの視線は夢乃に向いた。

「いや、私は知らないし……」

「私のクローゼットを漁れるのは、あんたしかいないじゃない！

返してよ！ 私のエルメスのバッグ！」

エミリは、物凄い剣幕ものずこで夢乃の肩を引つ掴む。手入れをした爪つめが食い込んで痛かった。

「知らないってば！ そんなに疑うなら、私の持ち物を見てみればいいじゃない！」

夢乃はエミリを振り払い、自分の居住スペースへと促す。

エミリは夢乃のクローゼットを勢いよく開けて中を漁りあさ、虫のように這いつくばってベッドの下などをくまなく探したが、エルメスの

バッグは見つからなかった。

「質屋に売ったのかも……」

「そんなことしないし。そもそも、エミリがバッグをしまったのは昨晚でしょ？ その時は私も部屋にいたし、それ以降は家から出てないもの」

ね、と夢乃はキミカとアイリに同意を求める。彼女らは、「私達が知ってる範囲では」と頷いた。

「じゃあ、誰が盗んだっていうのよ」

「勘違いじゃない？」

夢乃がそう言うと、「違うわ！」とエミリは声を張り上げた。

「まあまあ。そのうち出て来るかもしれないし」

今にも飛びかからんばかりのエミリを、アイリが落ち着かせようとす。

「もし、気になるんだったら、クローゼットに鍵でもかけちゃえば？
それが難しいなら、鍵をかけられる箱に入ればいいんじゃない？
大きな箱に入れば、持ち出され難いだろうし」

「……そうね。あんた達も、この部屋から変な物音がしたら報告してよね」

エミリに言われ、アイリは「うん、わかった」と苦笑いをする。
変な物音をさせたのはむしろ、男を連れ込んだエミリではないかと、
エミリ以外の全員が思っていたに違いない。

だが、事件はそれでは終わらなかった。

なんと、アイリやキミカの私物も、姿を消すようになったのだ。

「私のフェンディのワンピース、誰か借りた？」とアイリが困ったように尋ねたこともあった。

「シャネルのコスメ、ファンデーションを持って行った人いる？」とキミカが不機嫌そうに聞いたこともあった。

誰かの私物が消える度に、入居者全員でお互いの部屋の家探しをするようになった。アイリやキミカは個室に鍵をかけているので、誰かが侵入する可能性はないのに。

どんなに探しても、無くなった物は出て来なかった。

そうしているうちに、シェアハウスの空気は徐々に悪くなり、お互いがお互いを監視するようになっていた。

しかし、そんな状況下で、何故か夢乃だけ被害に遭わなかったのだ。

「なんで、私だけ物がなくならないんだろう」

新しく出会った男性とのディナーの帰り、夢乃はレインボーブリッジをぼんやりと眺めながら歩いていた。

他の三人の物があまりにもなくなるので、夢乃も、物が消えたと嘘を吐いたことがある。そうでなければ、自分が疑われると思ったのだ。

でも、他のみんなも夢乃と同じことを思ったのかもしれない。

エミリのエルメスのバッグがシェアハウス内でなくなったのを気まずく思い、自分も同じ目に遭ったから容疑者ではないと主張するつもりなのかもしれない。

特に、アイリは他人に話を合わせたがり、空気を読むのが上手い。

きっと、仲間外れになるのが嫌なのだろう。だから、その場に応じて上手く立ちまわろうとしているのだ。

少し要領が悪い夢乃は、それが羨ましくもあり、妬ましくもあり、日頃からズルいと思っていた。ちよつとだけ痛い目に遭えばいいと、思ったこともあった。

一方、キミカは頭に血が上りやすいところがある。

普段は取り繕っているけれど、粗暴なところがあるのは、エミリに掴みかかった件でよくわかった。

きっと、それを本人も自覚をしているのだろう。だからこそ、自分が疑われているのかもしれないと思って、名指しされる前に先手を打って、被害者になろうとしたのかもしれない。

言いたいことをハッキリと言えない夢乃は、キミカが少し怖かった。彼女に詰め寄られたら、きっと何も出来ないまま殴られるに違いない。

何とかして、彼女よりも優位になりたいと思っていた。

「こんなはずじゃ、なかったのにな……」

わざとらしく輝く夜景の光を浴びながら、我が家があるタワーマンションがそびえ立っていた。

誇らしく感じていたその姿も、今や、空虚な城のように思えた。

重い足を引きずり、エントランスに入ろうとする。

だが、その時、夢乃は違和感に囚われた。隅から隅まで煌めく視界の隅に、闇がわだかまっていたからだ。

ギョッとしてそちらを見ると、そこには、若い男が佇んでいた。

自身の存在を打ち消さんばかりの黒衣をまとっているが、目鼻立ちは凛々しく整っていて美しく、夢乃の頭からは、先ほどデザイナーを奢ってくれた男性の存在が消し飛んでしまった。

文句の付け所がない美男子だが、その眼差しは物憂げで、煌びやかな街に反して、どこか枯れているようにも見えた。

男は、タワーマンションを見つめていた。誰かと待ち合わせでもしているのだろうか。

そのまま立ち去るのも惜しい気持ちになる夢乃であったが、その時、男が夢乃の方に視線を向けたではないか。

驚いて飛び上がりそうになる。

周りには、夢乃以外の人間はいない。彼は間違いなく、夢乃を見ていた。

「君」

男は囁くような声で、夢乃を呼び止める。彼の声は涇流のせせらぎのようで、夢乃はもつと聞いていたと思つた。

「なんででしょう？」

夢乃は出来るだけ冷静に、営業スマイルを張り付けて応じる。

もしかしたら、この男は自分に興味を持ってくれたのだろうか。

マンションの上階には芸能人が住んでいるという噂だし、芸能関係者かもしれない。

浮かれる夢乃の気持ちに反して、男は不吉な言葉を投じた。

「異物には、気をつけろ」

「えっ？」

どういうこと、と訊ねようとするものの、男はそう警告しただけで踵を返してしまう。まるで、夢乃自身には興味がないと言わんばかりに。

「ちよつと……」

男の背中は徐々に小さくなる。

だが、夢乃は何故か、彼を追いかけることは出来なかつたのであった。

夢乃は首を傾げながらエントランスに入り、エレベーターホールへと向かう。

フロントではコンシェルジュが「お帰りなさいませ」と執事さな

がらに挨拶をしてくれたのだが、夢乃の耳には入っていないかった。「異物って何よ。物が無くなることはあっても、変な物が置かれてるなんてないし」

夢乃は乱暴に階数パネルを押し、十三階へと向かう。エレベーターが到着すると、大股でカゴを後にした。

しんと静まり返った廊下に、絨毯を踏みしめる音だけが響く。

自宅の前までやって来た夢乃は、バッグの中に入れた鍵をむんずと掴み、鍵穴にねじ込んだ。

「ただいま」

不機嫌さを包み隠そうともせず、夢乃はずかずかと玄関に入る。

だが、声は返って来なかった。闇がわだかまる室内が、彼女を迎えただけだった。

「なんだ。みんな出かけてるのか」

珍しいことではない。

シェアハウスのLINEグループにメッセージが入っているかもしれないと思いつつ、鞆からスマートフォンを取り出そうとした、その時だった。

奥の部屋から、物音が聞こえた。

「……誰かいるの？」

夢乃とエミリが使っている部屋からである。

また、エミリが男を連れ込んでいるのかと思ったが、そうではな

いらしい。なにかを物色する音のように思えた。

「まさか……」

夢乃の中に、どす黒い感情が湧き出した。エミリが、夢乃のクローゼットを漁っているのかもしれないという可能性が過ぎった。

バッグがなくなった時、エミリは明らかに夢乃を疑っていた。だから、その仕返しをするために、夢乃のクローゼットから何かを盗ろうとしているのかもしれない。

腹の底が、ムカムカし始めた。なんとしてでも、証拠を掴んでやろうと思った。

夢乃はスマートフォンの録画機能を作動させ、足音を忍ばせながら奥の部屋へと近づく。

そつとドアノブを捻ろうとしたが、鍵がかかっていた。

心中で舌打ちをしつつも、夢乃はそろりそろりと鍵を差し込んで回す。幸い、なにかを物色する音の方が大きくて、鍵をあける音は打ち消された。

そつと扉を開け、隙間から中の様子を覗き込む。だが、意外なことに、物色されているのは夢乃のスペースではなく、エミリのスペースだった。エミリのクローゼットが開けられ、衣類が床に散らばっていたのだ。

(なんだ。エミリが何かを探しているだけか)

ほっと胸をなでおろすが、違和感があった。何故、彼女は明かり

もつけずに探し物をしているのかと。

そして、扉の向こうにいるのは、本当にエミリなのかと。

——異物には、気をつける。

謎の男の言葉が頭を過ぎる。

夢乃は恐る恐る、誰がエミリのスペースを物色しているのか確認しようとする。

床に散らばる衣類の向こうに、クローゼットがある。そのクローゼットの中に、頭を突っ込んでいる者がいた。

(エミリじゃない……!)

同居人ではないどころか、それは奇妙な人影だった。

くびれがほとんどない、ぬるりとした輪郭りんかくで、棒のような手足がついている。身体はやけに平べったく、服は小さい身につけていなかった。

「ひっ」

夢乃は思わず、引きつった悲鳴をあげてしまう。

すると、異形の人影は軋きしんだ音を立てながら、夢乃の方を振り返った。

窓から差し込む大都会の灯りが、異形の人影をぼんやりと照らし出す。

人影の頭部には、顔がなかった。その代わりに、うつすらと木目のようなものが見えた。

よく見れば、その木目のようなものは全身に描かれている。平たい身体といい、板切れで作られた人形のようなだった。

「ひいいいっ！」

夢乃が悲鳴をあげると、異形はやけに滑らかな動作で、するりとその場から離れた。

半開きになっていた窓の隙間に平たい身体を滑り込ませ、あっという間に部屋から出て行ってしまった。

夢乃は弾かれたように、窓へと駆けつけて外を見やる。

だが、異形の姿は影も形もなくなっていた。部屋には、エミリの高級ブランドの衣類が散らばっているだけだった。

夢乃はしばらくの間、茫然と立ち尽くしていた。

ようやく我に返った時にスマートフォンを確認したが、録画していた映像は、何故か始終真っ暗で、夢乃の悲鳴だけが入っていたのであった。

不動産会社マヨイガに勤める榎のスマートフォンに連絡が入ったのは、ちょうどその頃だった。

珍しく、九重からだ。彼は、港区にあるタワーマンションの部屋

を、マヨイガが管理しているかどうか尋ねてきた。

「ああ、うちも十三階の一室を管理してますね。オーナーさんの意向で、シェアハウスとして貸し出しているみたいで」

『そうか。すまなかった』

スマートフォン越しの九重は、それだけ言って切ろうとしたので、榊は慌てて彼を止めた。

「いやいや、待ってください。何か問題でもあったんですか？」

『恐らく』

「それじゃあ、僕も行きますよ。うちの物件なんだし」

『だが、呪術屋じゆじゆつやが目をつけたというだけで、君は動けるのか？』

「えっ、どうだろう……」

よっぼどのことがない限り、榊が現地に直接行くことはない。今までは、よっぼどのがあったから、九重と行動をとるにも出来たのだ。

その時、近くの席で仕事をしていた同僚が、問い合わせの電話を取る。電話口の相手はひどく興奮しているようで、同僚は必死になってなだめていた。そして、電話口の相手とようやく会話が成立したと思いきタイミングで、同僚は榊の方を見やる。

「おい、心霊課しんれいか！」

「何それ！」

「お前の所属部署だよ。ここのところ、心霊現象が発生している事

故物件ばかり担当してるだろ？ だから、これもお前の領分じゃないかと思ってる」

榊の部署を勝手に設定した同僚は、保留をしている電話を指さす。

榊は、九重に待って貰いつつ同僚に尋ねる。

「どういう話？」

「港区のタワマンのシェアハウスで、木の形みたいなおぼけが出たんだとさ」

同僚が教えてくれたマンション名は、九重が調査をしたがっていたマンション名と一致した。

榊は、隣席にいる上司の柏崎を見やる。やり取りを横で聞いていた柏崎は、状況を察したように頷いた。

「専門家と今から行くって伝えておいて！」

榊は同僚にそう伝えると、九重に合流を促したのであった。

榊が件のタワーマンションまで赴くと、黒ずくめの九重が夜に溶け込むようにして待っていた。

柏崎がマンションの管理室に話を通していたお陰で、コンシェルジュがオートロックを解除して迎えてくれた。

現場は、十三階の一室だ。

やたらと多いエレベーターに戸惑いつつ、榊は九重とともに現場へと急ぐ。

「すごいマンションですね……。タワマンの中に入ったの、初めてかも……」

「そうだな」

九重は、コートのポケットに手を突っ込み、考え込むように応じた。

「九重さんも、タワマンは初めてなんですか？」

「いや、すごいマンションというところに同意をしたんだ。ここからもまた、呪具じゆぐの気配がするからな」

「ああ、霊的な意味ですごいっていうやつ……」

高級感というのは、九重の眼中にないらしい。タワーマンションに足を踏み入れたという興奮を共有出来ない寂しさを感じつつ、榊は十三階の廊下を急いだ。

すると、現場となった部屋の前で、若い女性が佇んでいた。

いわゆる、港区女子というのだろう。高いヒールを履いて、メイクをばっちり決めて、お高そうなワンピースをまとっている。手にはシャネルのバッグを携えていて、榊が思い描くタワーマンションの住民像そのものであったが、そんな彼女は、紅を差した唇を震わせて、榊達を待っていた。

「あの、里見夢乃さんですか？」

名前を呼ばれた女性は、ハッと顔を上げる。そして、九重の姿を見てギョツとした。

「あなた、さっきの！」

「えっ、知り合い？」

榊は、九重と夢乃を交互に見やる。だが、事情を話す間もなく、

夢乃は九重に掴みかかった。

「あなたのせいよ！ あなたが変なことを言うから、変な物が私の家に来たじゃない！」

「俺はただ、君から呪いの気配を感じただけだ」

九重は大きな手で、やんわりと夢乃の手を引き剥がす。

「呪い？ 何を言ってるの？ あの、木みたいなペラペラの人間と、何か関係があるの？」

夢乃の言葉に、榊と九重は顔を見合わせる。今まで、怪現象があった部屋に置いてあった、呪具である人型の板切れのことだろうか。

「木みたいな人間って、これくらいなの？」

榊は、手の中に納まるくらいの大きさを示す。だが、夢乃は首を横に振った。

「違うわ！ 人間の大きさよ！ 丁度、あなたくらいなの！」

「ひえっ」

ネイルを施された夢乃に指を差され、榊は悲鳴をあげた。そんな

中、九重がドアハンドルに手をかける。

「入るぞ」

「え、ちよっと」

夢乃が戸惑う素振りを見せるが、九重は構わずに押し入った。榊もまた、「すみません。お邪魔します」と頭を下げつつ、九重の後に続く。

部屋に入った瞬間、つんとしたかびくさ黴臭さが鼻を衝いたつ。空気は淀みよど、息苦しい。

呪われていた榊の部屋よりも、ずっと強い不快感に見舞われる。よく、こんなところで生活が出来るな、と榊は感心してしまった。

「感じるか」

九重に問われ、榊は頷いた。

「ええ。なんか、めちやくちや重苦しい感じですよ。こんなところにも、人って住めるんですね」

「自覚をしていないか、慣れてしまったかの、どちらかだろうな」
室内には誰もいない。女性四人の生活感に囲まれて気まずい想いを抱きつつ、榊は遠慮なく進む九重に続いた。

「例の異物がいたのは、ここか？」

榊は、奥の部屋の扉を開ける。そこはドミトリーになっているように、パーテーションが部屋を二つに分けていた。

あとからやって来た夢乃は、九重の指摘にきょうがく驚愕した。

「どうして、わかったの？ 何処の部屋とは言っていないのに……」

「気配がした」

「……気配だけでそこまで自信満々になれるわけ？ あなた、霊能

力者っていうやつ？」

「いや——」

呪術屋だと訂正するのだろうかと思っただけ、九重は天井に視線をやった。

「まだ、いるしな」

パーテーションと天井には、十センチほどの隙間があった。

その隙間に、じつとりと潜んでいたのだ。木で作られたような、人型の異形が。

「ひっ！ 窓から出て行ったんじゃないの？」

立ちすくむ夢乃に対して、九重は部屋に踏み込む。

「窓の外は確認したか？」

「したわよ！ 下に落ちたかと思っただけ、いなかったの！」

「ならば、上にいたんだろうな」

板材のように平べったい異形は、ヤモリのごとく天井に張りついている。きっと、マンシヨンの壁にもそうやって張りついていたのだろう。

頭部らしきものはあるが、顔は書かれていなかった。だが、異形が夢乃を凝視している視線は、専門家ではない榊でも感じられるほどだ。

「この異形に心当たりは？」

「ないわよ！ 何なの、これは！」

「呪いだ」

九重は異形を見つめつつ、端的に答えた。

「じゃあ、祓はらって！ おぼけが出たっていうトラブルで来たのなら、あなたにはその力があるんでしょ？」 呪いを祓はらってよ！」

「残念ながら——それは出来ない」

九重がそう言うと、夢乃の顔はたちまち強張こわばった。流石さすがの神も、九重の言葉にはギョツとした。

「ど、どうしてですか？ いつものように、きゅうきゅうナントカをやって下さいよー！」

「この現場では、俺が強制的に排除しても根本的な解決にならない。呪具を排除しても、新たな呪いが集まる可能性がある」

九重は異形から視線を外すと、静かに夢乃と向き合った。

「あれは君の味方のようにだ。君は、何を願った？」

「は？ 私の味方？ あいつ、エミリの部屋を物色してたのよ！」
エミリのエルメスのバッグを盗んだのも、きつとあいつよ！」

この部屋では、ここのとこ盗難被害が相次あいついでいたという。

お互いの部屋や道具入れに鍵をかけているにもかかわらず、何故か盗まれてしまうのだ。そのせいで、シェアハウスのメンバーの仲は険悪けんあくになっていた。

「君はその盗難被害で、何を盗まれた？」

「えっ……」

夢乃は言葉に窮する。それだけで、彼女が何も盗まれていないことは明らかだった。

「いや、おかしいでしょ！　何も盗まれていないってだけで、そいつは私の味方だって？　私はみんなの私物を盗んで欲しいとは思っていないし、盗まれた私物が私のもとに転がり込んで来たわけでもない。何も得していないから！」

「盗難は、願望が歪んだ結果だろう。恐らく君は、シェアハウスのメンバーに負の感情を抱いていたんじゃないのか？　痛い目を見てほしいとか、蹴落としたいとか」

「そんなこと……！」
否定しようとする夢乃であったが、言葉に詰まってしまった。思い当たる節が、あったのだろう。

「そんなこと……ちよつと思っても、こんなのに目をつけられるなんて、思わないし……」

夢乃は異形を一瞬だけ見やるものの、すぐにうつむくように目をそらしてしまった。

肩を落とす彼女に、榊なぐさは慰めるように声をかける。

「フツ―は、そう思いますよね……。僕もちよつと、似たような事件を起こしちゃいます……。その時は、まさかそんなことが原因だとは、って衝撃的だったんですけど……」

「あなたも……？」

夢乃は、恐る恐る顔を上げる。彼女の目が潤んでいることに動揺する榊であったが、なんとか首を縦に振った。

「実家が良くも悪くも田舎なんですけど、田舎暮らしが嫌すぎて自分で自分を呪っていたらしくて……」

お恥ずかしい限り、と榊は苦笑する。すると、夢乃は視線を落とし、重々しい口調で話し始めた。

「私も……似たようなものかも。私は地方都市住まいだったんだけど、刺激は少ないし、窮屈で……。実家も貧乏だったから、都会に出てたくさん稼いで、お金に苦労しない生活をしたと思って……」

セレブ然とした夢乃の姿からは、そんな背景は想像出来なかった。彼女いわく、身にまとっているブランド品は全て、デートをした男性からのプレゼントだという。

彼女はなんとか都内で就職出来たものの、どんなに頑張っても業績はパツとせず、給料も高くはないらしい。それがゆえに、家賃を少しでも安くしようと、シェアハウスにしたそう。

「世の中ってなんでも限りがあると思っただの。だから、誰かを蹴落とさないで、その上の生活は出来ないだって……。幸せになれないって心の隅で感じていたんだと思う」

「そうやって、自分自身に呪いをかけていたんですね……」

榊は同情するような面持ちになった。

「その気持ちが他者への反発心となり、呪いとなって、最終的にシ

エアハウスのメンバーに向いたのかもしれないな」

九重いわく、他者を呪う気持ちやシエアハウスのメンバーにも伝播^ばし、お互いに疑い合うことで呪い合い、ケガレが渦巻いていたのかもしれないという。それを聞いて、夢乃はますますうつむいてしまった。

「他者への反発心……。その通りかもしれない。私は色んなものが気に食わなかったんだと思う……。気取らない格好の上層階の住民に対しても、尤^{もつと}もらしい理由をつけて妬んでいただけなんだわ。あの人達にとってこのマンションは日常の一つに過ぎないから、ラフな格好をしていたというだけなのに……」

夢乃は、悔しげにした唇を噛む。

その時、榊は天井から奇妙な音が聞こえるのに気づいた。天井に張りついた異形を見やると、木の板で出来た指先で、カリカリと天井をひつかいているのだ。まるで、九重に対して威嚇^{いかく}をするように。

その様子に気づいた榊は、息を呑む。もし、異形が襲ってきたとしたら、身を挺して九重を守らなくては。

なにせ、専門家は彼だけだし、榊の恩人なのだから。

だが、それは杞憂^{きゆう}だった。

九重はあくまでも静かに、諭^{さと}すように夢乃に言った。

「幸せの形は、一つだけじゃない」

「……………どういこうと？」

「助け合ったり、支え合ったりすることで得られる幸せもある」

それを聞いた夢乃は、ハツとした。

それこそ、彼女が住まうシェアハウスはその形の一つだった。一人だと住むのが難しい憧れの場所も、何人かで支え合うことで住まうことが出来る。

「誰かの幸せな場所を、奪わなくてもいいのね……」

「ああ。幸せは、分け合うことも出来る。それで得られる幸せは小さくなるかもしれないが、分け合うことで出来上がった関係性が、新たな幸せに繋がることもあるからな」

「私は自ら、新しい幸せを放棄しようとしてたんだ……」

夢乃は目から鱗うろこが落ちたような顔で、その場に力なくくずおれた。その瞬間、天井に張りついていた異形の身体に、ぴしりと亀裂きれつが入る。その亀裂は、音を立てながら徐々に大きくなり、やがて、異形の身体を真つ二つにした。

窓の隙間から、重々しい空気があつという間にさらわれていく。いつの間にか異形の姿は消え、二つに裂けた小さな板切れのような人型が、パーテーションの右側と左側に落ちていた。九重がそれを回収するが、板切れにはもう、何の気配も残っていないかった。

室内には、夢乃のすすり泣く声だけが響いていた。だが、柵は彼女のことはもう、心配ないと感じていた。

零れ落ちる彼女の涙は、窓から見える夜景にちりばめられた光の

ように、美しかった。

彼女は自ら呪いを断ち切ったのだと、榊は確信したのであった。

その後、落ち着いた彼女と事情を聴いたコンシェルジュとともに、榊と九重は地下の集積所までやって来た。どうやら、各階にゴミステーションがあり、そこに捨てられたゴミを集積所に集約して、然るべき処置をするらしい。

そのゴミステーションの一角に、資材などが置かれている場所があった。普段、人出がある場所からは死角になるだろうそこに、九重は奇妙な箱を見つけた。

「あっ」

その、薄汚れた古い木箱を見た瞬間、夢乃が声を上げる。

どうやら、彼女はマンションの敷地内にぼつんと置かれていたそれを、手に取ったことがあるらしい。

「最初は誰かの忘れ物だと思ったんだけど、よく見ると妙に汚れているしゴミだと思って、ゴミの収集をしたスタッフさんに渡しちやったのよね……」

「それで、ここに行き着いたということか……」

九重いわく、箱に残る呪いの気配と、板切れの人型の気配は一致するという。人型は恐らく、箱の中に保管されていたのだろう。

「これ……、きつとみんなの私物だ……」

箱があった場所には、エルメスのバッグやフェンディのワンピース、シャネルのファンデーションが無造作に置かれていた。どれも、どす黒い泥のようなものをべったりとつけていて、つんとした臭気を漂わせていた。

「盗んだものを手にして、このねぐらに帰っていたのかもしれないな……」

「じゃあ、ずっとここに……？ 私達は、あいつと一緒に寝起きしていたっていうの？」

夢乃は、シェアハウス仲間の私物を回収しながら、複雑な顔をする。

「でも、どうしてあいつは私に……」

「恐らく、君が触れた時に縁が繋がったのだろう。だが、問題はこの箱がなぜ、敷地内にあったかだな」

九重はコンシェルジュに視線をやる。だが、コンシェルジュも全く心当たりがないようで、首を横に振っていた。

「……あいつがやったことは間違ってるけど、私に味方してくれてたんだよね。もし、私が間違っていなかったら、あいつも間違わなかったかな」

「……さあ、どうだろうな」

九重に問いかけた夢乃は、回収した仲間の私物をぎゅっと抱きしめた。

彼女は、シェアハウス仲間に事情を説明し、謝罪して弁償するつもりだという。彼女なりに、自分の気持ちと真摯しんしに向き合うらしい。

彼女は、自分に対する風当たりが悪くなることは覚悟していた。

自らの保身より、シェアハウス全体の雰囲気を変えることを選んだ。

「ひとまず、シェアハウスに出たおばけと、住民同士のトラブルは解決……か」

榊の立ち合いの仕事は、問題なく終わった。

だが、呪具を取り巻く謎はまだ解決していない。

榊が九重の方を見やると、九重はいつも以上に、険しい表情で眉間に皺しわを刻み込んでいたのであった。

(了)